



自由国民社

〔監修者略歴〕

岩浪洋三(いわなみ ようぞう)
昭和8年、愛媛県に生る。松山
商科大学卒。昭和34年スイング
・ジャーナルに入り、編集部を
経て同誌編集長。現在、音楽評
論家として活躍し、著書多数あ
り。

一枚のジャズ・レコード ￥ 350 〒50

1970年4月1日 発行

監修 岩 浪 洋 三

発行者 長 谷 川 国 雄

発行所 株式会社自由国民社

東京都中央区京橋2の8
第一生命分館

電話東京(281) 1271-5
振替東京 189009

印刷所 赤城印刷株式会社

日本音楽著作権協会出認番号443449

一枚の

ジャズ

レコード

監修 岩浪洋三



は し が き

ジャズの愛聴盤をめぐってのさまざまな随想——それが本書である。

ジャズこそ現代人の音楽であるといわれてきたが、仕事も生活も異にするこんなにもたくさんの人たちが、じつはジャズをかけがえのない音楽としておられるというのは、ちょっとした驚きである。

人生に決定的な影響を与えたジャズ・レコード、いつもとり出してきく愛聴盤、想い出のジャズ・レコードなどについて、自由に、気ままに書かれたのが、本書であり、原稿はまったくアトランダムに配列してあるので、読まれる方も、どのページから自由に読んで下さってもかまわない。

ここには、それぞれの分野で活躍されている著名な方たちが登場されているが、日頃本職で接するときはまたちがったプライベートな肉声がかかれ、ジャズとの出会いを通じて、書き手の生き方や音楽観までも知ることができ、一層親近感も増すことだろう。

ジャズは学校で教わったり、誰かに強制されてききはじめる音楽ではない。自分の手で掘り

当てた音楽であり、ジャズとの最初の出合いはある日空然であったり、ショックングであったりする場合が多いのではなからうか。本書には、ジャズとのそのような劇的な出合いもいくつか語られている。まるで、一編、一編が個性に富んだアドリブをきくような思いがする。

音楽を、ジャズを語るとは、自分の心を語ることもあるだろう。二つに収められたさまざまな随想は、ジャズを語ると同時に、人間の心の内面を語っている。ジャズを媒介にして、人間の心にじかに触れることもできるのが、このジャズ随想の楽しさであろう。

先輩のかたがたをさしおいて、私のような若輩が監修というのは僭越であるが、編集を手伝わせていただいたという意味にも解してお許しねがいたい。

なお、レコード・リストの作製に当っては、木全信氏の手をわずらわせました。お礼を申し述べたい。

目次

はしがき	3
------	---

I 篇 一枚の愛聴盤	11
------------	----

ビリー・モンク・マル	12
------------	----

詩人 富岡多恵子

ジャズのアドリブを私の芸に	17
---------------	----

落語家 立川 談志

ジャズよ、原始の火を	22
------------	----

作家 筒井 之隆

アニタ姉御のスキヤット	29
-------------	----

漫画家 富田 英三

僕の好きなJAZZ……………33

イラストレーター 中本 潔

幻の名盤をもとめて……………38

医学博士 栗村 政昭

サンラとそのクレイジー・ソウル……………43

演出家 金坂 健二

クル・セ・ママ……………50

詩人 白石かずこ

「マシユケナダ」による幻想……………57

イラストレーター たなべみえこ

食欲を増進させるディブ・ブルーベック……………63

漫画家 長 新太

ジャズは死なない 96

作家 湯川れい子

心の中でまわり続けている 72

女優 桑原 幸子

ジャズに魅せられて 76

俳優 高島 忠男

マイルスの「アラノンフェス協奏曲」 82

歌手 沢 たまき

深遠なマリガンのサウンド 86

作曲家 前田 憲男

カーメン・マークレー 91

ジャズ歌手 マーサ三宅

ジャズは楽しきもの 96

演奏家 北村 英治

素適なクリスティーのフィーリング 101

ジャズ歌手 後藤 芳子

ぼくの愛聴盤 106

ジャズ評論家 岩浪 洋三

思い出のジャズレコード 111

ジャズ評論家 油井 正一

レコード作品の幻影 117

ピアニスト 山下 洋輔

ジャズと私の出逢い 121

ジャズ評論家 木全 信

誰にも知られたくない一枚 127

音楽評論家 黒田 恭一

ニューオリンズ・ジャズのレコードから……………132

ジャズ評論家 飯塚 経世

ジャズとクラシック……………127

音楽評論家 藤井 肇

Ⅱ篇 ジャズ随想……………141

ジャズと反体制……………142

医学博士 牧 芳雄

ジャズ・クラブ……………147

ジャズ評論家 いそノテルヲ

私とジャズ……………151

評論家 本多 俊夫

ポップ・アートとジャズ……………157

画家 日向あき子

ただ一つの道……………162

国立音楽大教授 村田 武雄

フランク・タケイという男……………166

歌手 武井 義明

ジャズ・ヴォーカル……………170

音楽評論家 柳生すみまろ

独特のリズムと格調……………175

英文学者 並河 亮

ジャズに魅せられて……………180

医学博士 内田 修

耳から耳へ手から手へ……………184

文学者 木島 始

ニグロ・スピリチュアル……………193

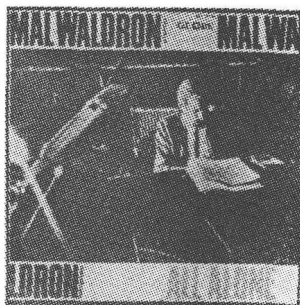
作詞作曲家 馬場 祥弘

ビートルズとジャズ……………195

作家 生島 治郎

一枚の愛聴盤





ビリー・モンク・マル

富岡多恵子

詩人

ビリーの演奏をきいて
詩のインスピレーションはわく

声もろとも全体がウタに

ある時ひとりでふいにビリー・ホリデイのレコードをかけ、それははじめてビリーの声をきいた時だったが、なんとなくただごとではないような気持ちになってもう一度かけ、つづけざまに五回くらいきいているうちに、そのなかの don't explain というのと my man というのと『ビリーブルース』というのが耳に残り、何故耳に残ったかといえ、声と

もにその歌詞の内容が半分くらいわかって、ひどくヤリキレナイ内容だったからだ。

ひる間ひとりでいるときはいつもそのビリーのレコードをつづけざまにかけ、横になるときたまその声をきいた。ビリー・ホリデイが、十四か十五くらいの時、売春婦までしたことがあるとかいう、その歌い手の物語をあとで読んだけれども、どちらかというとそういう物語はあまり興味がない。スイングするとかいうのか、ウタをうたうなんてものでなくて、声もろとも全体がウタになっていて、こういう歌い手には、批評家はバンザイする

しかないからさあみろという気がするし、そのセンチメンタリズムがきくものにべたっとしなだれかかってこないから何度でもききたくなるのであろう。というよりも、きくものをセンチメンタルにする力がその声にあるけれども、ビリー自身がセンチメンタルではないからなのであろう。

このレコードは、何ていうレコードだったかも氣にとめずきいているうちに事情があった目の前から消えていったが、その後同じビリーの晩年のヨーロッパでの録音のを買ったら、その声はやはりだいぶツヤが失われていて、そのかわり、同じ曲でもずっと乾燥したフィーリングで、ウタが向うまでとどく感じがして、むしろ、この方がわたしは好きになった。

ビリー・ホリデイの、一時期ピアノの伴奏者であったマル・ウオールドロンのピアノ・ソロのレコードを最近よくきいているが、最初きいた時、なんだかひどくツジツマがあっているピアノという気がして、それにピアノの上手を感じさせるので嫌だった。ピアノから離れようとしても、そのもくろみが透けて見えるようで、そこがセンチメンタルで嫌だった。

しかしビリーの伴奏には、これ風の上手でなくてはつとまらぬであらうし、なまじつかの前衛氣取りでは、ビリーという偉大な楽器に太刀打ちできなかったろう。

マルのソロをきく前にはセロニアス・モンクのソロのレコードをよくきいていたが、ジャズのピアノをきくまでピアノとは退屈なも

のだと思っていた偏見を、モンクのピアノはたたきこわしてくれた。なんでもそうであるけれども、うまさとか表現とかが表に出て、いかにもピアノならピアノと正面切って向かいあっているというのは好きではないが、モンクのソロは、どっちへころんでもたいしたことないよ、というフトイところと、真面目さへのテレと、気の毒なくらいのデリカシイがあって、それをなんだか楽しそうにやることでかくしてしまっている感じがして、好きになった。

マル・ウオルドロンのの方が、そういう点ではいささか書生っぽい気がする。もちろん、これはわたしの偏見かもしれない。しかし、音楽でも、悲劇より喜劇の方が一枚上手だとわたしは、思う。



ビリー・ホリデイー

ヒーズ・ファニー・ザットウエイ

(コロムビアX M—三五—M S D)

奇妙な果実

イエスタデイズ

ファイン・アンド・メロウ

ブルースを歌おう

ハウ・アム・アイ・トゥ・ノウ

マイ・オールド・フレーム

アイル・ゲット・バイ

波止場にたたずみ

アイル・ビー・シーイング・ユー

ヒーズ・ファニー・ザットウエイ

他全16曲

ビリー・ホリデイーの歌にエディ・ヘイウッド(ピアノ)ジョン・シモンズ(ベース)シド・カートレット(ドラムス)他

レコードは日本コロムビアのメインストリームX M—35—M S D。

ディスコグラフィー

ロマン派だとかなんだとかいう、音楽の歴史はぜんぜん知らないから、じつに救われていると思うのは、ジャズも歌謡曲も民謡も、義太夫節も、妙にかまえてきかなくていいことだった。

ジャズの思想というものも、あるのであるうけれども、批評するためにきくのでなく、きくのだから、無責任ながらわざわざ無理に考えることもないわけだし、好きなら好きでおそれいれば、おそれいっておけばいいのだった。

コルトレインなんていうのは、音楽の聖者だと、そのレコードをきいておそれいってしまったことがある。

しかし、よくジャズ喫茶とかいうところで、咳ひとつせず、おそれいってモダン・ジャズ

をきいているわかいひとのような体力も根気も暇もない。

とことんの芸人の歌を

そういうところへいくと、かれらの体力と根気とマシメサと暇に、おそれいって、音楽との二重のおそれいりで、ふらふらになってしまいうようである。

音楽にかんしては、山奥の村で、風呂をたきながら、その土地の唄をうたっているじいさん。

そのようなアマチュアか、とことんの芸人の音楽しか、わたしはどうしても好きにはなれない。

このことは、ジャズに対してもまた、おなじである。